

飛鳥寺西門地区の調査 現地説明会資料

1996年10月5日

奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

調査地：高市郡明日香村大字飛鳥字大門（史跡飛鳥寺 西門跡とその外側）

調査面積：230平方メートル

調査期間：1996年8月19日～継続中

はじめに

今回の発掘調査は、飛鳥寺西門跡に隣接する奈良県有地を公園整備するのに伴って行ったものです。調査地は、飛鳥大仏を安置する安居院本堂の西約80mの地点です。

飛鳥寺は蘇我馬子が用明二年（587）に発願し、崇峻元年（588）から建設した寺です。日本で初めて造られた本格的な仏教寺院でした。寺の造営には百濟からやってきた知識人や技術者が中心的な役割を果たします。

飛鳥寺跡は約40年前、1956年から翌年にかけて伽藍の中心部分を発掘調査しました。その結果、五重塔を中心に、その北と東西に三つの金堂を配置し、それらを回廊が取り囲むという、それまで日本では知られていなかった伽藍配置があきらかになりました。韓半島（朝鮮半島）、当時の高句麗には同じように塔の周りに金堂を三つ配置した寺はありますが（平壤清岩里鹿寺・上五里鹿寺）、日本では他に例がありません。塔の北にある中金堂の本尊が、今の飛鳥大仏です。

当時の寺は広い敷地をもっていました。飛鳥寺の敷地は南北に長い台形で、南北293m、東西は北で215m、南で約260m、面積約70,000平方メートルと考えられています。敷地の周囲には掘立柱塀が巡らされ、四方に門がありました。中世の文献によれば、東門には「飛鳥寺」、西門には「法興寺」、南門には「元興寺」、北門には「法満寺」の額が掲げられていたといえます。このうち、南門と今回調査している西門は既に、40年前に発掘調査が行われ、その規模や構造がわかっています。二つの門はともに礎石を据えた、正面に柱が4本並ぶ間口3間の門（八脚門）です。

西門の規模は、正面11.3m、奥行き5.3mあり、門が立つ基壇の大きさが正面13.8m、奥行き9.3mです。正面の柱間は中央だけが4.25m、両脇が3.5m。出入口が広く作ってありました。西門の規模を寺の正面の南門に比べると、南門は正面8.8m、奥行き4.6mしかなく、西門の方が大きく作られています。西門が南門より大きい原因は、飛鳥寺の西にあった「槻の木の間」との関連が指摘されています。「槻の木の間」は、大化改新を成し遂げる中大兄皇子と藤原鎌足（中臣鎌子）が出会った場所であり、後には、外国使節をもてなしたり、壬申の乱では軍隊が駐屯した場所でもあります。

では、西門の外側はどうなっていたのでしょうか。これまでの発掘調査で、次のようなことがわかっています。

西門あるいは西面大垣（掘立柱塀）から西約9mに幅1.15mの石組み大溝があり、西約18mにも幅0.5mの石組み小溝があります。大垣と石組み大溝の間には石敷きや石列があります。石組み大溝の西に接して南北方向の塀がありましたが、これは石組み大溝を作るときには撤去されていたようです。大垣の西約14mの地下には上水道の土管（土管暗渠）が埋められていました。

今回は、飛鳥寺西門跡の西北部の様子と、西門の外側の状況をさらに詳しく知ること、この二つを目標に発掘調査に入りました。

こんなものがみつかりました

飛鳥時代の遺構

1 西門の跡

西門は礎石を据えてその上に柱を立てた門でした。1956年の調査では南北3列ある柱のうち、真ん中と東側の柱列（棟通りと東側柱筋）の合計7カ所で柱位置を確認しました。東側柱筋の南端と南から2間目には礎石が残っていました。門の基壇周りには川原石で組んだ雨落ち溝（屋根から垂れる雨水を流す溝）がありました。

今回は、西側柱筋の柱位置2カ所を確認しました。礎石は残っていませんでしたが、礎石を据えるための基礎地業（据え付け掘形）を二つ確認しました。門の北西隅とその南側の柱位置です。推定される柱の間隔は3.5mです。西門西側にもあったはずの雨落ち溝は全く残っていません。しかし、西門を囲むように五つの柱穴があります。西側柱礎石位置から西2.6mに四つ、北西隅柱の北1.3mに一つ、の合計五つです。これらの柱穴は、西門を建設する時の足場の柱穴と考えられます。

2 石組み大溝

調査区のほぼ中央にある、両側に石を立て並べた溝です。溝幅は1.15m、深さ0.5m。側石の最も大きいものは幅70cm、長さ1mあります。溝底には拳大の川原石を敷いていますが、北の方では瓦が混じっています。溝が作られた時期は7世紀の後半ですが、幾度か改修され平安時代の初め頃に埋められたようです。その後、西側に素掘りの溝が掘られたため、西側の側石には倒れたものがあります。また、側石のいくつかは後世抜き取られています。

3 石列

石組み大溝の東側石の東1mには石列があります。今回の調査区ではその石はほとんどが抜き取られていました。石列と石組み大溝の間には石敷きがあったようです。以前、北で行った調査ではこの石列のさらに東1mにも石列があったことを確認していますが、今回は見つかりませんでした。

4 石組み小溝

調査区の西端でかろうじて確認できました。直径20cmほどの石を両側に並べた溝です。

5 南北塀

石組み大溝の西に接して塀の柱穴があります。柱の間隔は約2.6m。石組み大溝より古く、7世紀前半の塀と推定されます。

6 土管暗渠

直径20cm、長さ40cmの瓦製土管をつないだ施設です。幅1.5~1.8mの溝の中に据えられ、完全に地下に埋められていました。上水道のパイプです。水は南から北に流れていました。

平安時代の素掘り溝

石組み大溝の西側石の西に接して、幅約3mの素掘り溝があります。平安時代（10~11世紀）のもので、ほぼ南北に掘られています。最後は西に蛇行していようです。

この溝のために、石組み大溝の西側にあった飛鳥時代の施設は、土管暗渠を除いて、壊されていました。

出土した遺物

古墳時代から平安時代までの土器、飛鳥寺の瓦や銅製の刀装具、鉄釘などが見つかっています。瓦は西門と西面大垣の屋根にのっていたものです。飛鳥寺が作られた6世紀終わり頃から7世紀はじめ頃の瓦が最もたくさんあり、その後、7世紀後半や奈良時代に瓦を補填して修理をしていた様子がわかります。

まとめ

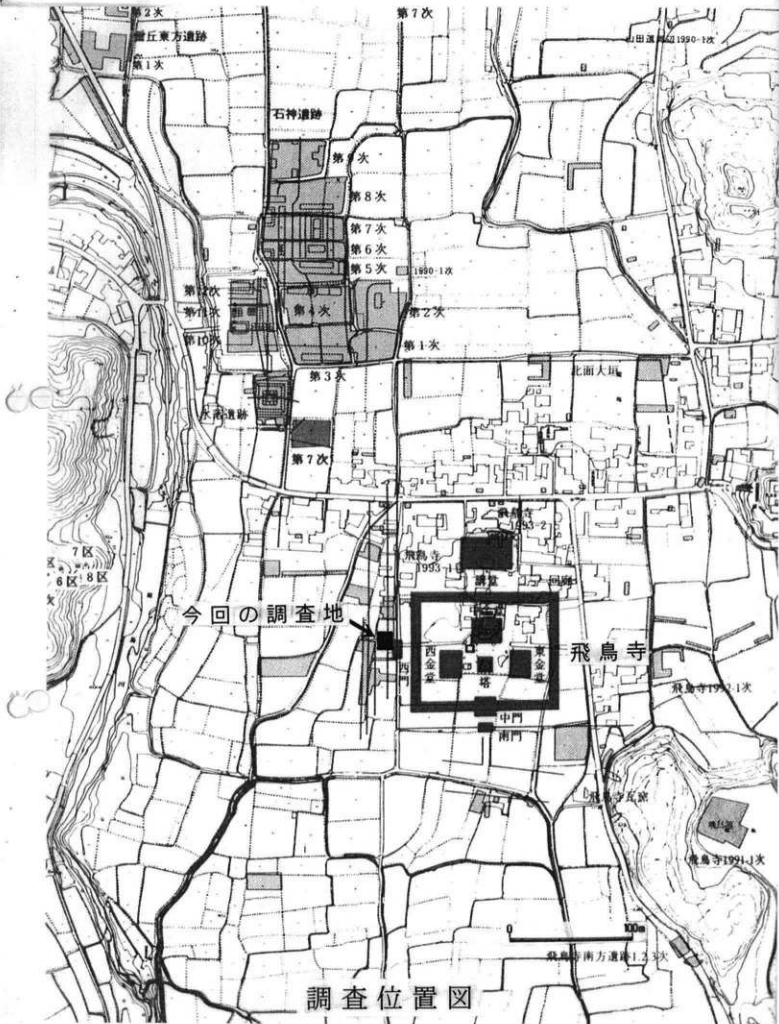
飛鳥寺の西門跡を40年ぶりに発掘調査しました。礎石や基壇は残っていませんでしたが、その位置や門の構造・規模を再度確認しました。

また、西門外側の状況も明らかにできました。今回の調査地の東（西門跡）は1956年に、南は1985年に、北は1989年に、さらに西方は1966年に発掘調査されています。南北塀と土管暗渠は飛鳥時代前半、石組み大溝・石組み小溝・石列などは飛鳥時代後半に造られたようです。周囲の調査成果を参考にすると、土管暗渠は南北100m以上、南北塀や石組み大溝、石列は南北50m以上にわたって続いています。調査地の西約10mには幅約4.3mの石敷きの南北道路があることも分かっています。このあたりは、『日本書紀』に何度も登場する「飛鳥寺の西の槻の木」の広場があったところで、飛鳥の中心部から北へ抜けるメインルートでもあります。今回、その一端を知ることができましたが、さらに今後の調査が期待されます。

今泉隆雄『古代宮都の研究』より

第1表 飛鳥寺の西の地域

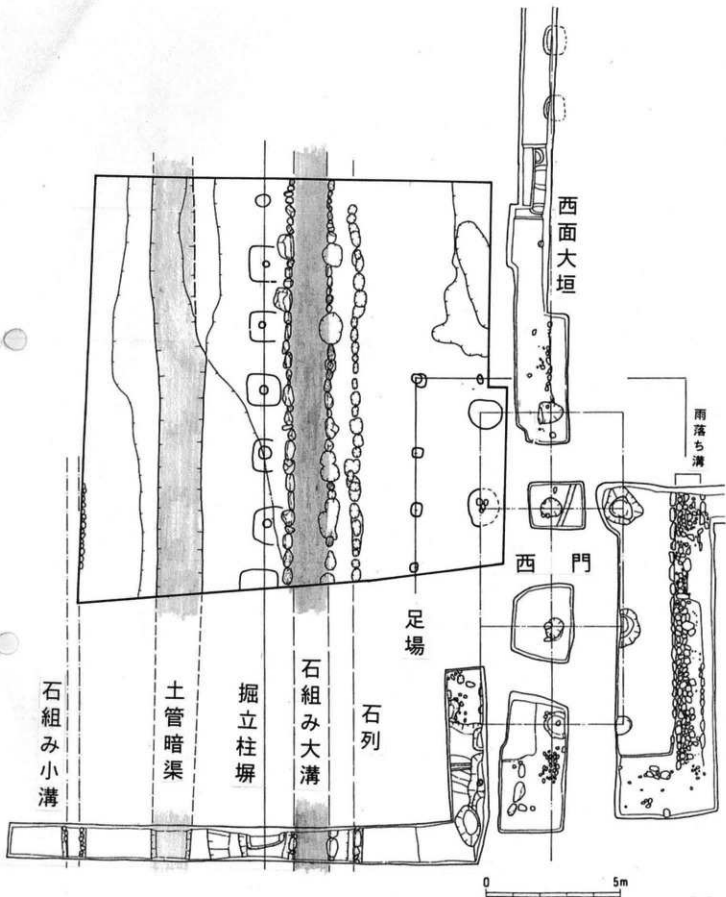
III										II			I		時期
i	h	g	f	e	d	c	l	k	j	b	a	番号	史料	史	料
持統						天武	斉明			大化	皇極				
九・五・丁卯(六九五)	二・十二・丙申(六八八)	十一・七・戊午(六八二)	十・九・庚戌(六八〇)	九・七・甲戌(六八〇)	六・二(六七七)	元・六・己丑(六七二)	六・五(六六〇)	五・三・甲午(六五九)	三・七・辛丑(六五七)	元・六・乙卯(六四四)	三・正・乙亥(六四四)				
<p>法興寺槻樹之下の打毬の時、中大兄皇子・中臣鎌子が親文を結ぶ。 乙巳の宴の時、大槻樹之下で、天皇・皇祖母尊・皇太子・群臣ら天神地祇に誓願す。 飛鳥寺西に須彌山像を作り、且に孟蘭盆会を行ない、事に親賢遠人を要す。 甘榜丘東之川上に須彌山を造り、陸奥と越の蝦夷を要す。 中大兄皇太子が初めて備刻を造る。石上池辺に須彌山を作り、唐儀四七人を要す。 壬申の乱のとき飛鳥寺西樹下に近江朝方が軍營を造る。近江朝方の興兵使藤原百足が飛鳥寺西樹下に新殺される。 飛鳥寺西樹下で多爾島人を要す。 飛鳥寺西樹下、自ら折れて落つ。 飛鳥寺西河辺に多爾島人らを要す。種々衆を要す。 明日香寺之西に集人らを要す。種々衆を要す。賜祿。道俗悉くこれを見る。 飛鳥寺西樹下に蝦夷男女二三人を要す。冠位を授け物を賜り。 西樹下に集人の相撲を見る。</p>															
内															
容															



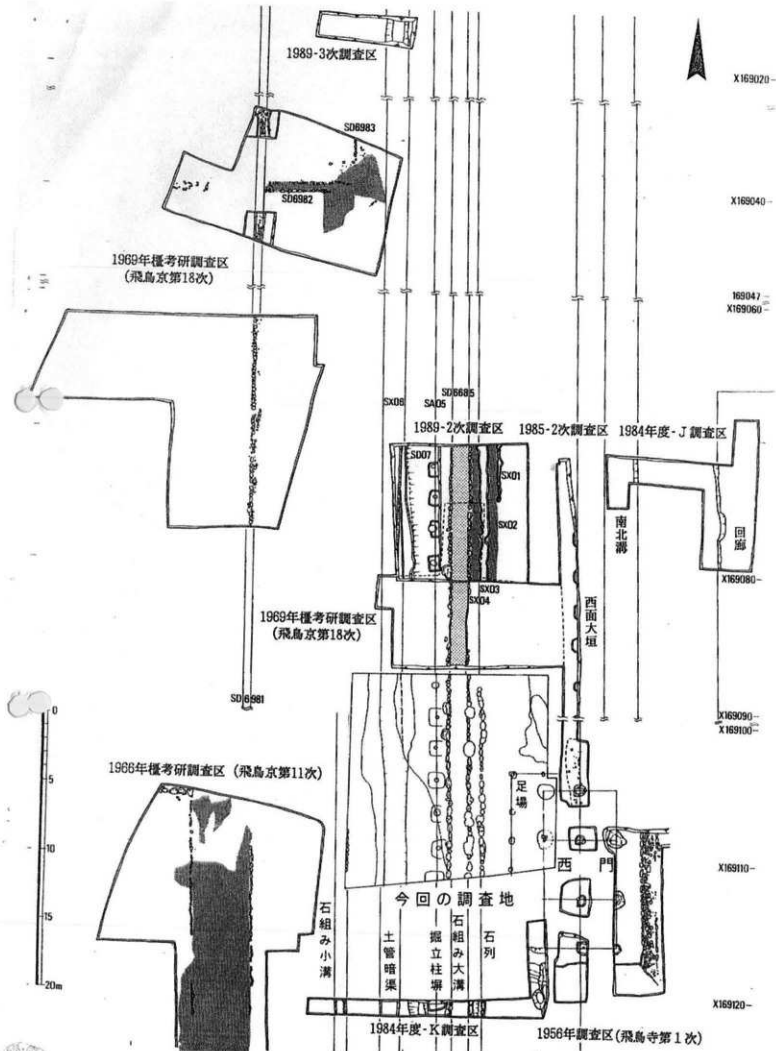
今回の調査地

飛鳥寺

調査位置図



調査遺構図



今回の調査地と周辺の遺構

